

1 お義母さんたちの観光旅行

「お義母さん、9時40分発の電車だからそろそろ出掛けましょうか。」

朝食を終えて居間でくつろぐお義母さんに私が声を掛けました。

「そうね、駅への送迎は面倒を掛けるね。私も運転するのにな。」

「いいよ、町の駐車場は一泊の費用も掛かるし、町に降りたらスーパーマーケットにも寄りたいたいから。」

まもなく私が運転する軽乗用車に旅行鞆を持った義母を乗せ、靖文さんが玄関で見送るなか、梅雨に煙る山道を降りてゆきました。

途中、恵子さんの家の前で車を止めて玄関に向かい、玄関の上がり口で腰を掛けて私を待つ、肩から斜めにバッグを掛けた恵子さんを車に乗せて発車。再び山道を降り、駅口で笑顔で手を振る温子さんと繁子さんに会うことができました。

駅前の一時停車場に車を止めて二人を降ろすと、駅構内の時間表で明日の迎えの到着時刻、17時20分をメモし、電車に乗り向い合せて座る笑顔の四人にホームから手を振って送り出しました。

義母敏子を含む仲良し四人組は数年前から年に何度か一泊旅行をしており、今回は房総半島の先端の温泉旅館に宿泊することでした。

駅を出ると町のスーパーマーケットに寄りました。

前日夫に、「土曜日は二人きりだしお義母さんたちも温泉旅館で美味しいものを食べると思うから、私たちもちよつとだけ豪華な食事にしない？」と声をかけたところ、夫も「大賛成！」とのこと。

その食材を探して店内を巡り、結局、ステーキ肉と海鮮ちゃんこ鍋の材料などを買って山道を登りました。

## 2 お姉さん来訪

二人が居間で昼食を終えた後、テレビを見ていると、家のそばに軽自動車の音がして間もなく止まりました。

「誰だろう、姉の車かな？」

「誰だろうね。」

まもなく玄関の扉が開き、茶系のシャツに白いパンツスタイルのお姉さんが入ってきました。

「こんにちは。」

「お姉ちゃん、こんにちは。」

「お姉さん、こんにちは。」

「お母ちゃん、今日は一泊で旅行に行っているのよね。」

「うん、いつもの四人組で観光旅行に行っているんだ。明日には戻るけど何か用事？」

「うん、昨晚お母ちゃんには電話で話したんだけど。この紙袋を渡したくて、お母ちゃんの部屋に入るわね。」

「うん、いいよ。」

お姉さんは紙袋を持って母屋の奥の部屋に行くと、部屋に入り、紙袋を置いてすぐに居間に戻ってきました。

「お姉ちゃん、コーヒーを飲んで行かないかい。自分たちもこれから飲もうと思っていたんだ。」

「お姉さん、飲んでいつて。今入れるから。」

「ありがとう。それじゃ、ご馳走になります。」

私は台所に行き、お湯を沸かして熱湯で濾したコーヒーをカップ3杯に注ぎました。

居間の座卓に運んできて三人が飲み始めました。

「お姉ちゃん、お母ちゃんの部屋に持ってきたのは何だったの？」

「借りていた浣腸器よ。」

「孝二さんに使ったの?」

「そう、このまえ使い終わって洗浄中に嘴管を傷つけてしまって。一ヶ月ほどお母ちゃんに借りていたの。」

「そうか、大変だったね。」

私は靖文さんから、お姉さんのご主人は歳が離れていること、40歳のとき業務上災害で下半身不随となり、車いすの生活を送りながらも、前勤務先から建築設計の仕事は今も委託されていると聞かされていました。

「新しい浣腸器は買えたの?」

「ええ、買えたわ。近くの訪問看護の会社に夫の訪問介護をお願いしているんだけど、その社員で私と同じ医療短大卒の方がいてね。相沢さんというんだけど、浣腸器を壊したことを話したのよ。そうしたら会社が購入する価格で1000ccのガラス製浣腸器を買ってくれたの。」

「そうなのか。」

「先週、訪問介護で相沢さんが来られたときに新しい浣腸器を持ってきてくれてね。その日は私が休務日で家にいたの。普段は私が週二回、夫に浣腸しているんだけど、相沢さんが持って来た新たな浣腸器で夫に浣腸してあげると言ってくれたの。夫をベッドで左向きに寝かせて、浣腸から排便処理までしてくれて、そのときの相沢さんの優しさに夫は喜んでいたわ。」

「そうなんだね。」

「アツ、あかねちゃん、こんな話をしてごめんね。この前もお母ちゃんに浣腸されて驚いたでしょう?」

「私、この前義母さんに浣腸されていたとき、お姉さんにも靖文さんにも見られてとても恥ずかしかった。またその日に、お姉さんがお義母さんに浣腸するところも見て恥ずかしかった。けど私、この家の習慣にだんだん慣れてきたような気がします。」

「ここは人里慣れた田舎だから浣腸のことも普通の会話と同様に話すのよ。あかねちゃんが育った都会のご家族が聞けばとても驚くと思うわ。」

「けど私、だんだん慣れましたから」

私はそう言つて笑顔で応えました。

### 3 夫がお姉さんに聞きたかつたこと

三人でコーヒーを飲んでいる途中、郵便ボックスの方が車で、ネットで頼んであつた私の化粧品を届けてくれました。

私は玄関に出て商品を受け取り、サインをして遠方までの配達を謝すると、車は山道を降りて行きました。

私は二階の部屋まで化粧品を置きに行つて、居間に戻りました。

「お姉ちゃん少し時間はある?」

「急ぐこともないけど。何かあるの?」

「うん、お母ちゃんもないし。もし嫌でなかつたら昔の話をしたと思って。」

「昔の話つて?」

「昔、両親に隠れてした浣腸のことだよ。」

「アツ、馬鹿ね、あかねちゃんがいるじゃない。やめましようよ。」

「実はあかねかも子供の頃、両親に隠れて姉妹で浣腸をしたと聞いていて。自分もこの機会にお姉ちゃんに聞いてみたいことがあつたんだ。」

戻り着いた私は夫の会話に耳を疑いました。

「アツ、靖文さんそんなこと言つて、もう…」

「あかねごめん。つい、口に出ってしまった。」

「もう、靖文さんたら…」

「えっ？ あかねちゃんも小さいころ、お姉さんと浣腸ごっこしたの？」

私は無言で顔を縦に振りました。

「そうなの。けど幼児期のアナルプレイで決して恥ずかしいことじゃないのよ。小さいころの性的欲求は肛門が中心になるの。それを肛門期と呼んでいるんだけど、年齢が高まるに従って、性的欲求は性器に移行するとアメリカの心理学者アダムハルマズローが論文に書いているの。だからあかねちゃんは子供の頃から正常に育つて来た証拠だから、恥ずかしがらなくてもいいのよ。ところで靖文、お姉ちゃんに聞きたかったことって何？」

「うん、お姉ちゃんが小学校六年生を限りに自分との浣腸プレイをやめたのはなぜだったのかと思って。自分の性器が固くなり始めた小学校三年生の頃がやめる時期と思ったのかなと思ってね。」

「ああ、そうだったのね。実はやめた理由はね、私が隠れて浣腸器を使ったことがお母ちゃんに知られたからなの。小学校六年生のとき。靖文は小学校からまだ帰っていないくて、浣腸がしたくなってごっそり取り出して使ったんだけど、そのときあやまって嘴管を傷つけてしまったの。どうすることも出来なくてね、お母ちゃんが帰ったときにごっそり、『おなか痛くて一人で浣腸していて浣腸器の先端を傷つけた。』と話したの。するとお母ちゃんがね、今考えると浣腸プレイで壊したことは分かっているのにそのことには触れず、『町の薬局で新しいものを買ってくるから』のことはお父さんにも靖文にも内緒にしておこうね。それと便秘のときは必ずお母ちゃんに言つてね。浣腸してあげるから。』と言われて、数日後、お母ちゃんが下の町で新しい浣腸器を買ってきて古いのは捨ててしまったの。それ以来、便秘のときはお母ちゃんに浣腸してもらっていたの。そのあと生理もあつて靖文との浣腸プレイをやめてしまったのよ。」

「そうだったのか。けど二十歳を過ぎてもお姉ちゃんはお母ちゃんに浣腸をされていることは自分も気付いていたよ。」

「医療短大に入つて以降も学生寮から実家に戻ったとき、便秘がひどいときははしてもらっていたの。靖文はそのとき見たのね？」

「いや、見たというよりも、奥の部屋からお姉ちゃんとお母ちゃんが出て来て… 外の便所に行くところだったと思うんだけど、その時お母ちゃんの手で浣腸器が握られていたのを偶然見たんだ。」

「そうか、そのときはそうだったかもしれないわね。それがね、医療短大に入った後、私がお母ちゃんに浣腸をし

てあげることもあったのよ。お母ちゃんの便秘がひどいとき。」

「フーンそうだったの、知らなかった。浣腸はおねえちゃんが看護師として就職して以降の事と思っていたよ。」

「お姉ちゃん、もう一つ聞いてもいい？」

「何？」

「このまえ、あかねがお母ちゃんに浣腸されたとき、お母ちゃんにクリームを塗った指を直腸内に入れられてマッサージされたというんだけど。それが性感を強く刺激されるようで気持ちがよかつたと言っていたんだけど、あの直腸内マッサージは医学的なものなの？ 自分がお母ちゃんに浣腸されたときにはそんな記憶はなかつたよに思うけど。」

「そうね、実は私が医療短大で学んでいたときのことだけだね。高校を卒業後、一度医療業務を経験した人が同期にいてね、その人から教えてもらった性感高揚の方法なの。患者さんの中には生きる希望さえ持てないほど意欲を失くした方もいてね。例外中の例外だけど、相手の反応を診ながら直腸内を指でマッサージすると、意欲を取り戻すことが出来る場合がある事を教わったの。私もその方法を彼女から教わってから、帰ってお母ちゃんにその行為が気持ちいいと話したのよ。そしたら実際にお母ちゃんが試してみたの。でね、それ以来癖になつてしまったの。だからあかねちゃんにも浣腸の快感を増すために直腸内マッサージをしたと思うのよね。」

「そうだったのか。」

「ところで靖文。お母ちゃんが電話で、今後は便秘をしたら靖文に浣腸してもらおうからと言っていたよ。」

「そうなんだ。実は前月のことだけど、お母ちゃんが浣腸をする日にあかねも便秘をされていてね。お母ちゃんがグリセリンを持っていたから、お母ちゃんと一緒に奥の部屋であかねにも自分が浣腸をしたんだ。そのとき、以前あかねが直腸内マッサージが気持ちよかつたと言っていたので、事前に二人で相談して、お母ちゃんも歳をとつても消せない性的欲求を落ち着かせるために、浣腸の時にお母ちゃんに直腸内マッサージをしたんだ。お母ちゃんは直腸内マッサージを僕からも受けられることを知って、僕に浣腸を任せたと思うんだ。」

「そうなのね。私は実家から家が離れているので、必要な時のみお母ちゃんに浣腸をしてあげていたけど、靖文

がしてあげるなら有難いわ。それにしても驚いた。あかねちゃんは靖文の看護助手さんようになっていたのね。」

「お姉さんごめんなさい、出過ぎてしまったようで。」

「あかねちゃん、違うの。私嬉しいのよ。あなたはうちのお嫁さんにふさわしい人だわ。我が家の奥さんでいてほしいのよ。」

そう言われて私は下を向き、頬を赤らめました。

私は本心からお姉さんが大切に思ってくれることで、以前にもましてお姉さんが好きになりました。

また内心、夫と私とお姉さんの三人で浣腸プレイが出来ればなんて思ったのです。

しかしその思いはすぐ現実になったのです。

雨がザーザーと強さを増してきました。

「雨が強くなったわ、もう帰ろうかしら。」

「お姉ちゃん、雨がやむまで待てよ。もう少ししたら止むと思うから。」

「そうよ。スマホで天気予報を見たけど間もなくこの地域の天気は良くなると思うから。」

「それじゃ、もう少し待たせてもらおうかしら。」

私は再度、熱湯で濾したコーヒー三人分をポットに入れて居間に運び、座卓のコップに注いで再び全員が飲み始めました。

#### 4 三人で浣腸プレイ

三人でコーヒーを飲んでいるとき、夫が小さな声で「お姉ちゃん、なんか変な気分になってきた。20年を超えるけど、浣腸プレイしてみないか？」

「突然な話ね。あかねちゃんがいるじゃない、変なこと言わないでよ。」

「あかねはどうだい？」

わたしは下を向いて黙っていました。内心したい気持ちは湧いていました。

「あかねちゃん、嫌でしょう？正直に言っつて。」

私はその言葉を聞き、顔を下にしたまま「嫌ではないです。」と言っつてしまったのです。

「あかねちゃん、嫌じゃないの？」

「あかねも良いと言っつているし。しようよ、お姉ちゃん。」

「もしかしてあなた達、二人とも浣腸マニアだったの？」

私は返事をしませんでしたか、夫は「そうかもしれない。」と言っつてしまったのです。

お姉さんは気持ちちが吹っ切れたように、「それじやいいわ。私が毎週二回、自宅で夫に行く浣腸を靖文に試してみましようか？」

「うん。」と夫が言い、私もそれに無言で頷きました。

場所は以前子ども部屋として使っつていた部屋を使うことにしました。

それは当時、勉強や就寝に使っつた部屋で、奥の部屋とは逆の、西端に近い、台所に対面する部屋です。

その場所に三人が移動すると、お姉さんは素早く作業を割り振りました。

「あかねちゃん、その襦を開けて布団を一枚敷いてくれる？それと台所でコップ一杯の水を入れてきて。靖文の体を洗淨するから洗面器と濡れたタオルを二枚準備してね。私は車に行っつて、買っつてある大人用おむつと医療用使い捨て手袋一箱、それとローションを持っつてくるから。」

「靖文はお母ちゃんの部屋から浣腸器を持っつて来て。それと、居間からティッシュペーパーのボックスも持っつてきて。それと、あかねちゃんが布団を敷いてくれたら全裸で寝るのよ。いいわね。」

「わかった。」

5分程して三人は集めたものを部屋の座卓の上に揃えると、お姉さんは私を連れてお便所の隣の洗面所に行き、手洗いの方法を教えてくれました。

「あかねちゃん、から私が手を洗うから見ていてね。」

お姉さんは石鹸と流水で30秒ほどかけて両手を洗い、備え付けのタオルで手を拭きました。

私もそれにならつて30秒ほどかけて両手を洗い、同じタオルで手を拭いて部屋に戻りました。

そしてお姉さんが持つてきた医療用使い捨て手袋の箱から二人は手袋を取り出して、両手にはめました。

「さあ、あかね看護助手さん。今から寝ている靖文の処置をしますね」

「はい、お姉さん看護師さま。」

夫は布団の上に全裸で仰向けに寝ています。

お姉さんは手袋をはめた手で、寝ている夫の性器を持ち上げて、上半身を濡れタオルで拭きました。またうつ伏せにして拭き、その後、陰部や肛門周辺を時間をかけて丁寧に拭き上げました。

「あかね看護助手さん、私がしたようにもう一度拭いてみて。」

「はい、わかりました。」

私はお姉さんがしたとおり手袋をはめた手で寝ている夫の下半身を、仰向け、うつ伏せにして優しく拭いた後、特に陰部や肛門周辺も丁寧に拭き上げ、夫は気持ちよさそうに目を閉じていました。

それが済むとお姉さんは夫の体をうつ伏せにして足を少し広げさせたのです。

「この前お母ちゃんに行った直腸内マッサージとは根本的に違う『指責め』だからよく見ていてね。」

そうと言うと、うつ伏せに寝ている夫の足を広げた場所にお姉さんが片足を立てて座りました。

左手で夫の肛門を開くと、ローションを塗った右手の人差し指を直腸内に入れて、最初は緩やかに、そしてだんだん激しく抜き差しを続けて、夫はその刺激で目をつむったまま「ウウウ…」と小さな声を出し続けました。

お姉さんは床に置いた腕時計で3分経つたことを知ると肛門から指を抜きました。

「あかね看護助手さん、『指責め』が分かりましたか？」

「はい、わかりました。お姉さん看護師さま。」

「それでは今度は私が腕時計で計るから、もう3分間、私がやったとおりにやってみて。」

夫は再びの3分に驚いた様子でした。

私は姉さんに替わって夫の足の開いた中央に私が座り右ひざを立てて、左手で夫の肛門を開き、右手人指し指にローションを塗って直腸内部に入れました。

優しく、激しく抜き差しを続け、お姉さんの「3分経ったわ。」の声で指を肛門から抜いたときは、夫の肛門はポツカリと丸く穴が開いていました。

指責めが終わったあと、私はお姉さんに素朴な質問をしました。

「お姉さん、ご主人にもこの指責めをするのですか？」

「そうよ、夫にしているの。」

それを聞き、お姉さんたち夫婦の隠れたセックスを垣間見る思いでした。

「次は浣腸よ。グリセリンは使わないからコップの水を浣腸器で吸い上げて注腸するの。嘴管はオリーブ油をつけるのが一般的だけど、ここではローションを使うわね。」と言ったとき、夫がお姉さんに声をかけました。

「お姉ちゃん、紙袋のグリセリンは二本入ってるけど、お母ちゃんには二本持つてくると言っていたの？」

「浣腸器を返しに行くとは言ったけどグリセリンについては何も言っていないの。うちではいつも500ccを六本単位で買うからここでも使うことがあればと二本持つてきたけど、一本使ってみる？」

「うん、使いたいなあ。」

「あかね看護助手さん。患者さんがあんなこと言っているけど、どうでしょう？」

「私、お姉さん看護師さまの判断に従います。」

「そう、それじゃ使いましょうか。今から私がグリセリンを取ってくるけど、靖文、我慢は5分間としていたけど、

10分我慢してもらいます。わかったわね?」

「うん、我慢するよ。」

夫はそうは言ったものの、10分はとても無理ではと私は思っていました。

お姉さんがお義母さんの部屋から500ccのグリセリンを一本持つてくると、「あかね看護助手さん、台所で大きなコップに水100ccを入れて来て。そこにグリセリン100ccを入れて200ccの浣腸液を作つて頂戴。量は大体の量でいいから。」といました。

私は、「はい、お姉さん看護師さま。」と応えて、向かいの台所で水を入れ、奥の部屋からお姉さんが持つて来たグリセリンを入れて約200ccの浣腸薬をこしらえました。

お姉さんは浣腸薬を受け取ると、浣腸器の嘴管を浣腸液に浸けてピストンを上下して攪拌したあと、一旦座卓に置きました。

仰向けに寝ている夫のお尻の下におしめカバーとおしめを敷き、その後、体を左に立てて足を軽く曲げ、50ccで4回、合計200ccを注腸しました。

注腸後は体を仰向けに戻しておしめカバーを閉じ、「10分我慢するのよ。」と伝えました。

夫は目をつむり「うん。」と応えたのでした。

私は布団近くに置いた夫の着衣を部屋の端に寄せたとき、お姉さんが耳元に近づき小さな声で、「おしめをつけているから10分我慢しなくても誰にも分からないの。」と言われ、私は笑顔を返しました。

## 5 私とお姉さん浣腸

「あかね看護助手さん。あなたにも浣腸しますから、お尻を出さない。」

「私にも?」

「そう。旦那さんがおむつをして寝ている横で、あなたにも浣腸をします。」

「わかりましたお姉さん看護師さま。浣腸をお願いします。私も横向きですか?」

「あなたには四つん這いで行います。」

「はい、お願いします。」

私は手袋を手から外し、しゃがんでスカートを引き上げ、パンティを脱いでから、側に畳んで置いて四つん這いになりました。

するとお姉さんは後ろから私の露出した陰部をシツと眺めるのです。

そういえばお義母さんも私の陰部を見ていたようだったが、陰部から愛液が濡れ出しているのではと不安が湧いたのです。

するとお姉さんが、「あかねちゃん、陰部から愛液が濡れ出している。やはり浣腸されるのが好きだったのね。パンティにもシミが付いている。先にお母ちゃんも言っていたけど。」

私はその言葉に慌てて「靖文さん恥ずかしい…」と言ってしまった。

おしめを着けて横になり、笑顔で私を見ていた夫から「あかね、お姉ちゃんとお母ちゃん以外は絶対知りえないことだから安心して。」と言われました。

お姉さんからも「家庭内の秘密なんだから安心してね。」と言われましたが、でも私は、「エエエ、お姉さん、ほかの人には絶対に言わないでね。今日のごはお義母さんにも黙っていてね。」と口に出してしまいました。

それでも私は内心、あの浣腸のサイトを発見して以来、靖文さんと結婚に至り、お姉さんとも知り合って、この家でこうしていることに誤りはなかったとの思いでした。

「あかねちゃんにも指責めをしておくわね。」

「はい、分かりました…」

お姉さんは私のお尻の後ろにしやがみ、左手指で肛門を開き、ローションをすくった右手人差し指を直腸内に  
入れました。

最初はゆつくり、そしてだんだん激しく、前後に刺激を続けると、私は目をつむり「ウウウ…」と声をあげてし  
まいました。

3分の指責めが終わるとお姉さんは部屋を出て、再び台所でコップに水を入れて戻り、グリセリンで浣腸液を  
作り、二度に分けて100ccを注腸したあと、「あかねちゃん、少し我慢してね。」と言うのでした。

お母さんにされた時と同様に私の体に入った生温いその感覚に、「泣きたくなるような気持ち悪さ」と、「これ  
がグリセリンの浣腸なんだ」と思わされるような浣腸の魅力が相まって、暫くの間我慢しました。

暫くするとおなか痛み出し、これが本当の、「浣腸の痛さ」を知るのです。

でも痛さをじつと我慢していると、なんて素晴らしい事だと思ってしまうのでした。

やがておなかは、ゴロゴロという音を出しはじめました。

排泄を促す蠕動が、周期的に襲ってくるようになり、私の肛門からは、プツ、プツという恥ずかしい音が出てきた  
のです。

その音を聞いたお姉さんは、「もうトイレに行ってもいいよ。」と言いました。

私はパンティとスカートを元に戻すとお便所に走り、5分ほどかけて排便をしてから部屋に戻りました。

その後再び手袋をつけてお姉さんと一緒に夫のおむつで濡れた体を綺麗に拭き、内容物はビニール袋に入れ  
て、処分はお姉さんが家に帰つてすることでした。

着衣を整えた夫が座卓の上に残ったグリセリンの量を見ると、「お姉ちゃん、二人分しかグリセリンを使つてな  
いから350ccも残っている。お姉ちゃんにも浣腸していいかい?」と声を掛けました。

「そうね、私にも浣腸して。」

「わかった。あかね、コップに水を入れて来て、グリセリン50%で200ccの浣腸薬をこしらえて。」

「わかりました。」

夫は私が作った200ccの浣腸薬をピストンで攪拌している間、お姉さんは素早く白系のズボンを脱いで自分の横に置き、畳の上で四つん這いになり、お尻を出しました。

夫は浣腸器を座卓に置くと、後ろ側から露出したお姉さんの陰部と肛門を両手で開き、無言で見に私に見るようにと誘うのです。

側に行つて見てみると、陰部はすでにネチャネチャと愛液が濡れ出し、側のパンティも濡れが見えて息をのむほどの状況でした。

私は濡れたお姉さんの状態が、私たち三人の「秘密の証」のようにも見えて、早晚三人は一生アナルのお付き合ひになるのではと思ったのです。

「いつまでものままの格好にしておく気なの?」

お姉さんの声で私たちは我に帰りました。

「お姉ちゃん。浣腸のまえに3分間、指責めをしておくよ。」

「うん、して…」

「あかね、床の腕時計で3分を計りなさい。」

「はい、分かりました。」

夫は人差し指にローションを塗ると、うつ伏せになったお姉さんの直腸内を激しく前後に刺激を続け、お姉さんは目をつむつて「ウウウ…」と声を上げ続けました。

3分経つたことを伝えると、夫は、「これでやめるよ、お姉ちゃん。」と言いました。

お姉さんはハーハーと息を継ぎ、指を抜いた肛門は丸く穴が開いていました。

「浣腸するよ。」

「して…」

私は再び炊事場に行き浣腸薬を準備すると、夫は浣腸器で攪拌した後、私が横で見ている前で、四つん這いのお姉さんに50ccを4回、計200ccを注腸しました。

お姉さんは四つん這いの格好で我慢していましたが、突然パンティを履き、白系のズボンを履いてお便所に走り、5分ほど掛けて排便して、その後部屋に戻って来ました。

三人は子ども部屋を前の状態に戻しました。

それから夫は浣腸器を洗つてお義母さんの部屋に返しに行き、お姉さんはビニールに入れた汚物等と共に使い掛けのグリセリンの瓶や手袋などを自分の軽自動車に運び、私はコップや濡れたタオルなどを洗いました。全てが終わると、居間に全員が戻って来ました。

## 6 セックスを考える姉さん

「お姉さん、靖文さん。もう一杯コーヒーは如何ですか？」

「お姉ちゃんはどうする、コーラもあるよ?」

「そうね、体が火照つたからコーラを貰おうかしら。」

「お姉ちゃんがコーラを飲むなら自分もコーラにしようかな。あかねはどうする?」

「それなら私もコーラにします。」

私は氷を入れたグラスに冷蔵庫から取り出したコーラを注ぎ、居間に運びました。

居間でコーラを飲んでいるとき、お姉さんは一人無言で何かを考えているのでした。

「お姉ちゃん、どうしたんだい?」

「私ちよつと考えることがあつてね。」

「なに、どうしたの。」

「うん…。」

「言いなよ、困っていることがあるの?」

「迷つてしまう。」

「お姉ちゃんらしくないよ。誰にも言えないことかい? 家の借金でも出来たの?」

「借金の話じゃないのよ。夫の収入は以前勤めた会社から建築設計を委託されているし、障害年金もあるの。私も働いているから生計に問題はないのよ。」

「それじゃなんだよ。自分たちに出来ることかい?」

「うん靖文、妙なことを聞くけど驚かないでね。あかねちゃんにも相談しなければならぬことだけ。」

「どうしたの?」

「やっぱりちよつと言いつづらくて…」

「なんだよ、言いつづらいつづら。」

私も何事かと耳をそばだてていました。

「言うわ。もしもだけど…もしもだけど、私が靖文にセックスを望むとしたらどうする?」

「えつ、お姉ちゃんと尻腸プレイはしたかったけど、セックスは考えてないよ。孝二さんのセックスは無いの?」

「主人は身体的にセックスが出来ない身体なの。」

「私、いま36歳で看護主任になつていてね、将来の役職も見込まれるように思うの。けれど時々セックスのことで頭がいっぱいになることがあつて…実はね…夜な夜な渋谷にでも出かけて、酒に酔つた見ず知らずの男性に

ホテルで身を任せたい欲求が湧くことがあるのよ…」

「危ないよ、お姉ちゃん。もしも職場でそんな噂でも立てば、県立病院を退職しないといけないよ。」

「そうなの。実際には理性が優先するとは思ってね。けどもし理性を超える衝動に衝かれたときが恐ろしいの。今日三人で流腸プレイをした時に、ふと靖文とのセックスなら絶対に秘密が守れると思ったの。あかねちゃん、悪く思わないでね。」

「お姉ちゃん。理由は分かったけどこの件は孝二さんの信頼を裏切る恐れもあるし。あかねとも話したいから返事は来週まで待つて貰えないかい？」

「無理なことだと分かっているの。けど、どっちにしても返事を待つているわね。」

「私、お姉さんの心情分かります。今日のことでお姉さんが一層好きになりました。セックスのことは靖文さんと話はするけど、お姉さんとはこれからも信頼関係を育てていきたいです。」

「あかねちゃんありがとう。これからも信頼関係を育てましょうね。」

「はい、是非お願いします。」

「それじゃ私、帰るわね。」

「お姉ちゃん、今日は本当にありがとう。来週中にはメール入れるから。」

「お姉さん、ありがとうございました。」

雨も止み、お姉さんは山道を車で降りていきました。

## 7 愛の行為

「あかね、おねえちゃんのことをどう思った？」

「うん。お姉さんとはこれから一緒にいたいし、信頼できる人だと思うの。」

「そうか、それはよかった。それでお姉ちゃんと自分とのセックスのことはどう思う？他人のあかねが聞けば異常と感じなかった？」

「お姉さんは職場で伸びていく人だと思うの。またお姉さんの家庭的な事情も考えると、あなたとお姉さんのセックスも私は許せる気がするの。ただ、お姉さんと二人きりのセックスはやめて欲しいの。私も必ずその場をいたい。」

「そうかよく分かった。セックスは三人が揃うなら構わないということでもいいかい？」

「うん。三人なら、私それでいいと思うの。」

「わかった。そのときは三人で行うと約束する。それにしてもあかねがお姉ちゃんのことを大切に思ってくれて安心した。自分はあかねを妻として一生大切に作るからね。でも姉への感情なんだけど。あかねへの感情はおかしいと思うけど別だと思うんだ。姉弟感情と言えばそのとおりなんだけど、恋愛とは違うんだ。分かりづらいだろう？」

「ねえ靖文さん。姉弟の感情のことだけど、私も分かる気がするのよ。私も靖文さんとの愛情とは別の、実のお姉ちゃんとの姉妹感情を昔から持っていたように思うの。」

「それは新潟に嫁いでいる麻衣さんのことかい？」

「そうなの。恥ずかしいけど小さい頃から洗腸をしていた麻衣姉ちゃんとは、恋愛感情とは違う姉妹感情を抱くのよ、何年経っていても。そしてその感情は、靖文さんとの関係とは違う、姉妹関係だと思ってるの。」

「そうなのか。我々は二人とも姉妹や姉弟感情を強く抱いてしまう性癖を持っているかもしれないね。」

「うん、そんな気がするの。」

「それじゃ、姉と自分たち三人のセックスを姉が望むならOKと覚えてもいいかい？」

「いい。だって私もお姉さんが好きだから。」

「無理なこと言っておめね。」

「ごめよ。」

「それじゃ来週と言っていたけど、今メールをしてもいいかい？」

「してー」

夫はその場でお姉さんに「今日はありがとう。三人一緒であればOK。必要なときはメールして。」と打ちました。

10分ほどしてお姉さんから「了解しました。ありがとう。」というメールが届き、その文面を私にも見せてくれました。

ただ、三人のセックスといつても夫とお姉さんに私が入つてとなると、どんなセックスになるのか分からないけど、夫に従っていればいいかなと思ひ、考えることはやめました。

「あかね、今夜の食事は6時過ぎから準備してもいいだろう？」

「うん、いいけどなに？ えっ、また浣腸するの？」

「浣腸の量が少なかったんだ。もう一度二人で浣腸したいし、あかねに『愛の折檻』もしたいんだ。」

「そうね、わかりました。」

二階の寝室に戻ると二人は全裸になりました。

夫は納戸の収納箱から200ccの大型浣腸器とバケツを持ち出しました。

私もローションと、1リットルの計量カップを持ち出して洗面所で水を入れて来ました。

まず私が四つん這いで人差し指にローションをすくい、夫への指責めを最初は優しく、その後だんだん激しい刺激を3分程続けました。

その後に私が「ああ… ああ…」と呻き声を出して、3分間の刺激を受けました。

次に夫は大型浣腸器の嘴管にローションを塗り、私の四つん這いになった肛門からお水を3回、計600cc入れ、5分ほど我慢させられました。

その後ベッド横のバケツにしゃがみ、液中心の排便をすると、夫はティッシュペーパーで綺麗に拭いてくれました。続いて夫に四つん這いで1リットルの注腸して、私は右手で我慢している夫の性器を前後に刺激しました。やがて私が排便したままのバケツに夫もしゃがんで液中心の排便をし、私はティッシュペーパーで綺麗に拭いてあげました。

その後バケツの清掃は、前回は私が行ったので今日は夫が行いました。私は浣腸器を洗剤で洗って夫に渡し、夫はローションと一緒に納戸に戻しました。

続いてセックスです。私たちは結婚して普通にセックスをしていました。

ただもつと高い満足を得たいと二人が思っていたところ、ネット上で「トップ女優北条麻紀の膣開発教材」のビデオを発見しました。

二人は興味を持ち、2万円程でそのビデオをダウンロードしました。

加えてその方法をより理解するために、「刺激LIFE 没頭させる連続オーガズム実践ビデオ」というのも2万円程でダウンロードしました。

それから何度かセックスを繰り返す内に、Gスポット刺激、括約筋刺激、ポルチオ刺激の三技法を覚えめました。セックスのために初めの愛撫、胸への愛撫、キスの交換や女性器への愛撫などを繰り返した後に、Gスポット刺激15分、括約筋刺激30分、ポルチオ刺激15分の計一時間が私たちにとつての最良の時間と感じました。続いて性交を15分ほど重ねて、同時に果てる方法を見つけ出しました。

それまでは私は、夫が勃起し、射精してイッてしまうことでセックスが終ることを普通と感じていました。でも女性なら誰も同じと思いますが、イッた後でも引き続き愛撫をしてもらえたら、まだ長くオルガムズが続くのに残念と思っていたことも事実でした。

それを三つの技法（Gスポット刺激・括約筋刺激・ポルチオ刺激）をビデオで覚えたとき、セックスの技法は異

常に高まり、夫は「私を楽しむとても気持ちのよい時間」と言い、私は、「得も言えない悦楽の境地に入るような、現実と妄想の混濁を続けることを強く感じられる時間」として、いつの間にか夫が私に与える「愛の折檻」と呼ぶようになっていました。

その日も夫はベッドの上で私を愛撫し、胸への愛撫やキスの交換、女性器への愛撫などを繰り返した後、左手で優しくクリトリスを、トントンと刺激しながら右手指二本を膣口から2〜3センチのところに挿入して、第二関節を上曲げるGスポット刺激を15分しました。

引き続き、膣口から4〜5センチ入った左右どちらか一方の壁面に、指の腹を押すようにして1〜2センチほど動かす、括約筋刺激を30分続けました。

その頃には普通は指が届かない子宮部が下りてきており、ポルチオが指の奥に触ることが出来るので、引き続き15分かけて最奥部周辺(ポルチオ部)を優しく、優しく刺激し続けました。

これがポルチオ刺激ですが、夫は、「考えると今までのセックスは自分中心のセックスだったのが、私に快感を与えることで夫婦が満足できるセックスになった。」ということです。

その日も私は一時間を超えて私の「ウツ、ウツ、ウ〜ンウ〜ン、グウググ、グウググ〜、ウツ、ウツ、グウググ、グウググ、グウググ〜」と止むことのない大きな嗚咽が一時間を超えて続きました。

その後性器の挿入を繰り返して二人で同時にイきました。

30分ほど二人が仮眠したあと、居間に降りてゆき、夕方6時30分頃から私が夕食を作り始めて、夫と共にテレビを観ながら料理とビールを味わいました。

二人とも酔いと疲れのまま二階に上がり、リビングで窓を開いて椅子に腰を降ろしたのは午後10時を過ぎていました。

いつものように愛の言葉を交換しました。

「あかね、お前はこれから一生僕の妻として暮らすことになるけどそれでいいね?」



あかね、今回の作品も驚きました。

今回は姉が入つてのことだったけど、私の知らないあかねのことが出来るのが出来て本当に興味深かったよ。

結婚して一年六か月を経て、やっぱりあかねは私の考えと同じ考え方と同じだと確信しました。

結婚に至ったこと、母に流腸されたこと、姉の母への流腸、夫婦の愛の時間、愛の折檻など、自分とあかねの性癖が余すことなく明らかにされています。

二人が結婚したことをあかねは成功と書きましたが、私はあかねの二乗倍の成功として一生の幸せ者であることを申しておきます。

松本 あかね様

松本 靖文より

<https://www.spaceginga.com/>

SPACE 銀河

